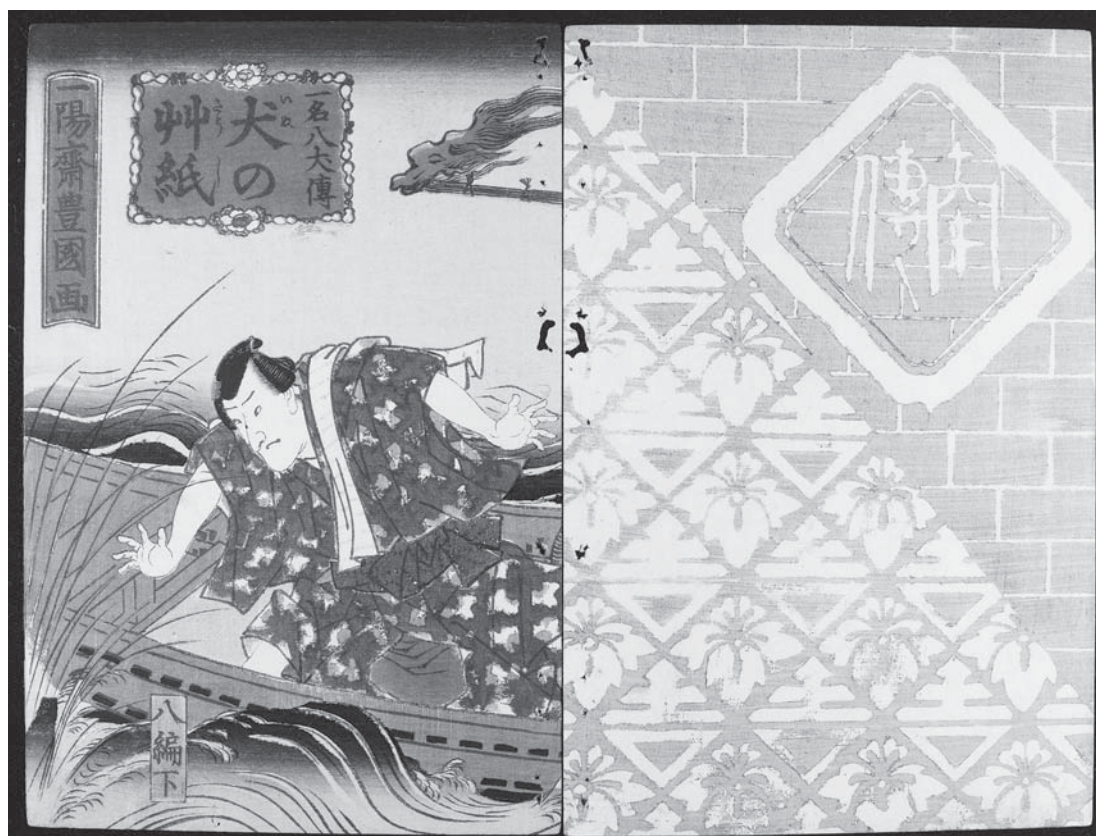


翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十六)



図版1 八編上原裏表紙(色刷)、八編下原表紙(色刷)

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十五)」(『京都光華女子大学／京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第五十三号、平成二十七年十二月)の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「八編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

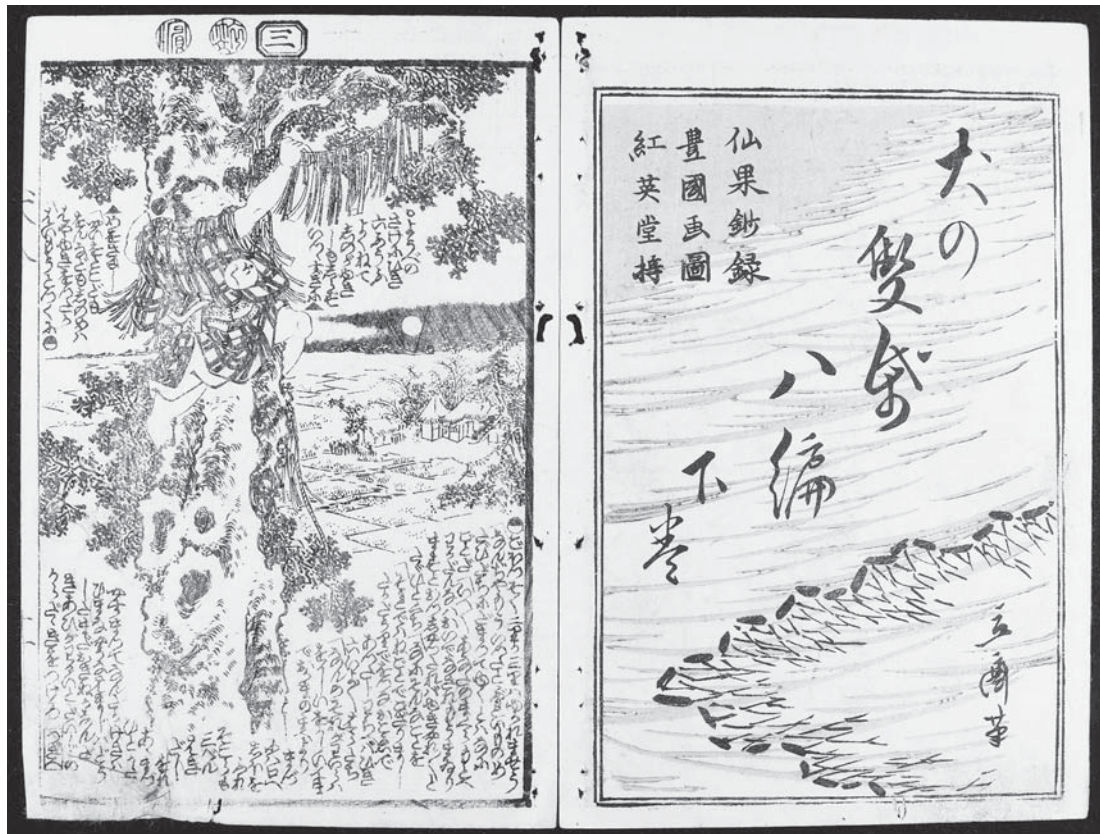
3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い(ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった。まれに原文中に出てくる句点には、「ママ」と傍注した)、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「は」に改めた(原文の「あるいは」は「は」とした)。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために()に入れた。ただし、袋表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に()をつけなかった。

肥留川 嘉子
隅田 三鈴



図版2 原表紙見返し（色刷）、十一オ

ところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「八編下」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕

一名八犬傳／犬の／草紙

八編下

一陽齋豊國画

（振り仮名は原文のまま）

〔原表紙見返し〕

犬の／雙紙

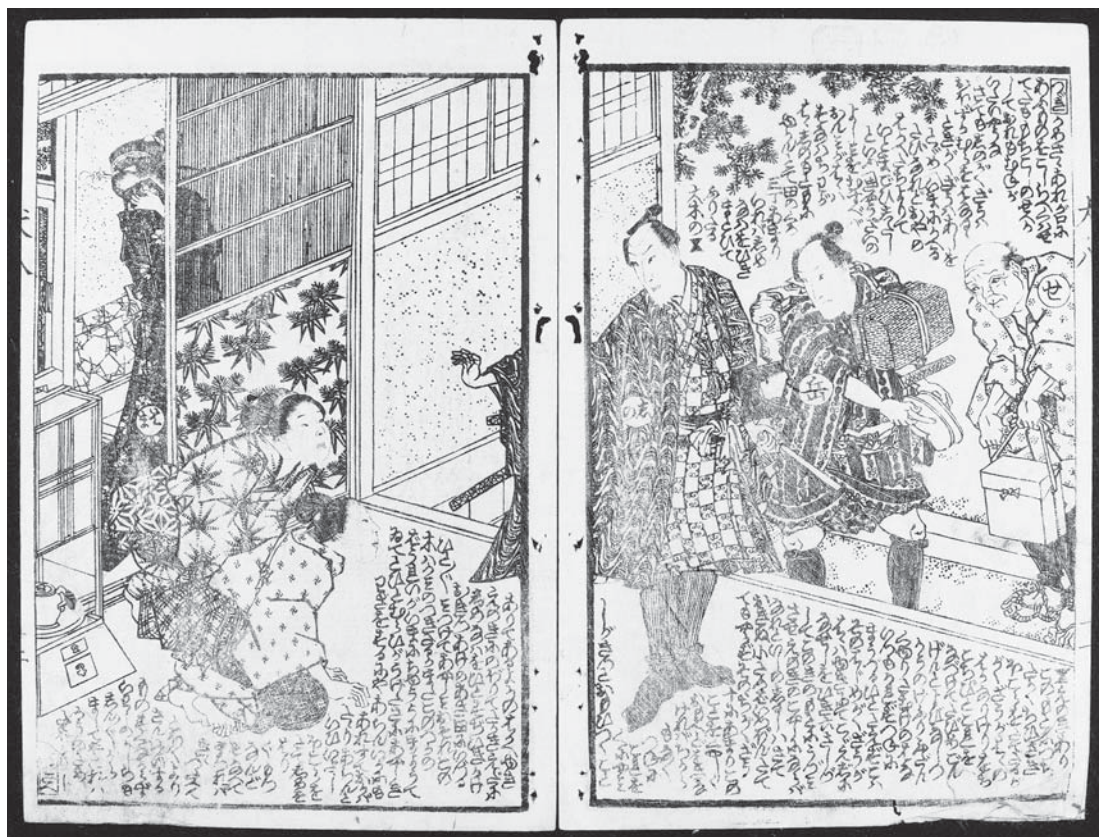
八編／下／巻

仙果鈔録

豊國画圖

紅英堂梓

立齋筆



図版3 十一ウ、十二オ

〔十一オ〕

三

○昨夜の／酒に非義／六夫婦／よく寝て／篠兎が行き／しも知らず。／五、
過ぎに●●目を覚まし、／『やい男共／女共、篠兎めは／はや行きをつ
たか』／『はい、もう疾づくに●●御発足。二里か三里は行かれませう』
／『なんぢや、もう行つた。無礼者め。／旅立ちに黙つて行くとは何／事
だ』『いへく貴方の枕元へ／若旦那はおいでなされ、』もう参り／ます』
と仰つたれば、『行き遣れく』と、／たゞ一口『何、そんなことを』
／『それでは寝言でござりまし／たか。道理で乙なお声で／あつた』ト笑へば、
非義／六いよく腹立ち、／『何のそれが汝等は／可笑しい。可笑しい手間
／で、お釜の前より／まづ庭口へ／塩を／振れ。／其処らも／三遍／掃き
／出し／をれ。／嗚呼まづ／一方／休まつて、何だか今朝は／暇なやうな。
破魔兎は如何／した、まだ起きぬか。何だ、／気合が悪いと。大事の／体
、／気を付ける。』

つぎへ

〔十一ウ—十二オ〕

つぎ 瓶さ、あれが口に／合ふ物を拵へ食はせ／てたも。持ち越しのせ
へか／して俺も胸が／痛いやうな』／○さても篠兎、岳藏は、／大須賀村を
離る、／時、岳藏は足を／止め『今に帰る／旅なれど、親の／墓へ立ち寄
て／暇乞ひしたし』／と言ふ。『兄弟の／誼を結べば／御身が母は／即
ち我が／母』篠兎も『共に／行かん』とて、田の畔／三丁余り／入れば、
注連／縄を引き／纏ひて／古りたる／大木の●●榎あり。／この下に土／
高く小さき／祠を建てたるが、／岳藏が母の／墓なりけり。をち／こち人
これを／名付けて行女権／現と呼びなす。／香の煙／不斷／燐り、手向け
の花／何時も枯れず、常に／詣づる人絶えず。こは／その始め、岳藏が／母
は雪にて凍え死に／なせしを、非義六指図／してこの木の下の下に埋み／させ、
榎の肥やしにならば／なれと、石の標はさて／おきぬ、小塔婆一本立て／
てもやらす。その後岳藏／十に余り、この／ことを悔しく／思へど、幼／



図版 4 十二ウ、十三オ

ければ力ちから／もなく、／常に／これを／苦くるに病み／しが、きつと思ひつくこと
とありて、或る夜、かの墓はかへ行き／椀えんに登りて高き枝に／注連繩しめなはを一筋
引き掛け／置きつ。明けの朝、田に出づる人々見付けて怪しみ恐れ、
「この／木は神の憑つきたるか、またこの塚つかの／亡霊ばうれいが今に中有ちゆううに迷うて
ゐて、問ひ弔とらひが受けたさに妖あやしき／業わざをするにやあらん。如何にも／
あれ、捨て置かば／祟たりあらん」と言ひ出だし、／祠ほくらを／建て注連を／張は
り／供物ぐもつ／なんど／供へて／祀まつれば、／聞き、伝つたへて／遠くより／参詣さんけいする
者もの少なからず。／鰯いわしの頭かしらも／信心しんぐから、／ましてやこれは／孝かうのため
りし／つぎへ

〔十一ウー十三オ〕

つゞき 幼子の／志を／天道の哀れ／と思し召したりけん、誰言ふとな
くこの墓の霊は、女にやまひの病には灼かなる験ありと、次第く人々の群
れ来て、折れば忽ち利益あり。非義六も聞捨てられず、人の挙りて信
ずるに、恐気立ちて祟りを恐れ、始め祠を建てし人に米一俵づゝ取らし
ける／とぞ。こは八九年昔のことなり。衛次が妻は幸ひなく、知らぬ旅路に行き疲れ、浅ましき死に様なりしが、良き子を持ちて天道の御恵み深く、亡き霊を神にさへ祝れて斯く人々に敬はるゝは、また羨ましく幸ひならずや。されば二人は母の塚懇ろに伏し拜み、それより洲鴨も西瓦かしら、箕回みの石濱はいし、墨田河がすだ渡れば武蔵のも後になりぬ。疑ひ深き非義六等、後より人を付けまじきものにあらずと、道にては猶打ち解けては物言はず。されども然様の氣色も見えねば、やうくに安堵なし、その夜は栗橋の駅に宿りぬ。**●**はや許我へは四里の道中、**●**暁がけて発つにも及ばず。相宿りの人も無ければ、こよひは夜すがら語り明かりし日頃の鬱々を晴らさんと、嘆きつつ笑ひつ物語る言葉に絶え間はなかりけり。」篠兎は再び神宮川の一件を詳しく語り、非義六が浅ましき巧みを語り、「さりながら我水れんを義六が得たる故、はかりことも空しくなり、年頃執念がけし御太刀をも思ひ切り、手放して許我へ遺るは定めて本意なく思ふらん」



図版5 十三ウ、十四オ

ト言へば岳藏声を潜め、「御太刀のことも／念は抜けず。神宮川にて仕損
 じても、猶／懲りずまに和殿をば殺さん心はいよく／止まず。和殿を
 片付け御太刀を奪ひ、預け／置かれし田畑も返さず。陣代ひがみを婿／に
 取らんと、この四ツを一つも欠／さず一度に／成就あらせん手配り」「そ
 れを知るは如何に」と言ふに、「昨日各／留守のほど、伯母御はつきへ

大権現

狸益子

狸

賽銭

賽

行女大權

行女大

〔十三ウ―十四オ〕

つゝき我を／招き寄せ、「岳／藏、手前を／供に遣るは大／事の用事を／さ
 せう為。言ひ／出し難きこと／なれど、篠兎は／甥にてありながら／前の世
 にはかた／きであつたか、此方／の人を親の／仇の、年頃／日頃付け狙ひ、
 ／寝首を搔／んと／する様子。／確かに証／拠もなきこと／なれば、言へ
 ば／血で血を／洗ふ恥と、／盾になり／陰に／なり／●●今日まで／事な
 く暮らし／たが、彼奴が／今度許我への／旅立ち、●●事も遂げずに／帰
 るならば、いよく／此方／の人を恨み」何事をし出すか知れず。／事の起こ
 らぬその先に、／頼むは手前が剛勇大力。／一刀に刺し殺し腰物を／奪ひ
 取り、そつと持て来て儂に／渡しや。残りの路用も其方に／やる。為果せた
 らば大きな手柄。／七つから使ひ慣れて心の知れた／正直者。婿にして跡
 ／取らせう。この脇差は我が／父上、正作様のお差添。／守り刀に貰うて
 おいた／きりいちもんじと呼ぶ業物。／これを貸さう」と、これこの脇差／
 渡して無理に泣き面で「甥を／殺すも夫の為。俺ほど因果な／者はない」な
 ど、出もせぬ涙を擗み／二人が日頃仲悪しく見するに／騙され、浅はかに
 心の底を／打ち明けらるゝに、その時我は／勇み立ち、「犬須賀殿には遺恨
 あり。／お主の光を刃に添へ、／討たば手柄、の犬須賀殿もやはか／討



図版6 十四ウ、十五オ

たれぬことあらじ。一命捨て、仕留めませう」と真しやかに肯ひしが、我なればこそ事も起こらぬ。余人に剛毅の者ありてこの謀計を肯は、用心、弛まぬ和殿なれども、こと面倒に候はん」ト言ひつ、刀を「
ぎへ

〔十四ウー十五オ〕

つぎ 指し示せば、「かの人達の腹汚さ。さもあらん／さもあらん。養ひの恩にむ／くいず立ち去るは義にあらねど、亡き父の遺言にも「姉／夫婦か志、改まり／なば、汝もまた実を／尽くせ。弥増しに悪心勝らば、御太刀を守護して早く／去れ」とは今際の教訓。預け／置きたる田畑あれば彼処の／養ひ実を受けねど、かほどの／心底見る上は、いよく／以て／義理はなし。御太刀も凶事なく／持ち出づれば、何を嘆き誰を／恨みん。嗚呼、この刀も祖父の／形見、今思はずも見る嬉しさ。／兄弟の御身が手に渡りたるも／自然の幸ひ。いざやこれより諸／共に、許我へ行きて身を立て給へ」ト／言へば、岳藏吐息を吐き『元来／望むことなれど、従ひ難き／謂はれあり。見殺しにされた／母の敵と言は、言ふべきなれど、七ツ八ツより養はれ、人に隠／せど剣術、柔、馬に乗り／弓を引く武道のあらまし／心得しも、師匠を取らぬ／我が儘なれど、今人並みの／人、成るも推して行けば主／人の恩。暇も乞はで立ち／退きては、友達には義あれ／ども主人には忠に／あらず。されば少し身に傷／付け、篠兎は討ち漏らしたりと／偽り言ふて帰り行き、その／上にて暇を取り、後より／許我へ赴くべし。また愛ほし／きは破魔児殿。暁方に／立ち聞、して男泣きに泣き／ました。我だにあらば如何にも／して過ちもせさすまじ。ともかくも明日はまづ大須賀へ／帰るべし」ト言ふ言葉には強ひ／ても止め得ず。次の日猶よく／言ひ語らひ、二人は左右へ／別れけり。○破魔児は篠兎に／別れてより、蚊帳は取れども／起きも上がらず、心地悪し／とて物を食はず。二親は／気を苛ち、医者よ按摩と／騒ぎても、いよく／心は／爽やかず。「陣代への婚禮／如何に／」とぬるでより日毎／夜毎に催促して、今日も／また手紙を遣せ「今非義六に／来れ」とあり。驚き入つて駆け／行くに、媒次は苦りきつたる／顔色。「今に篠兎は家に／居るか、婚禮は何



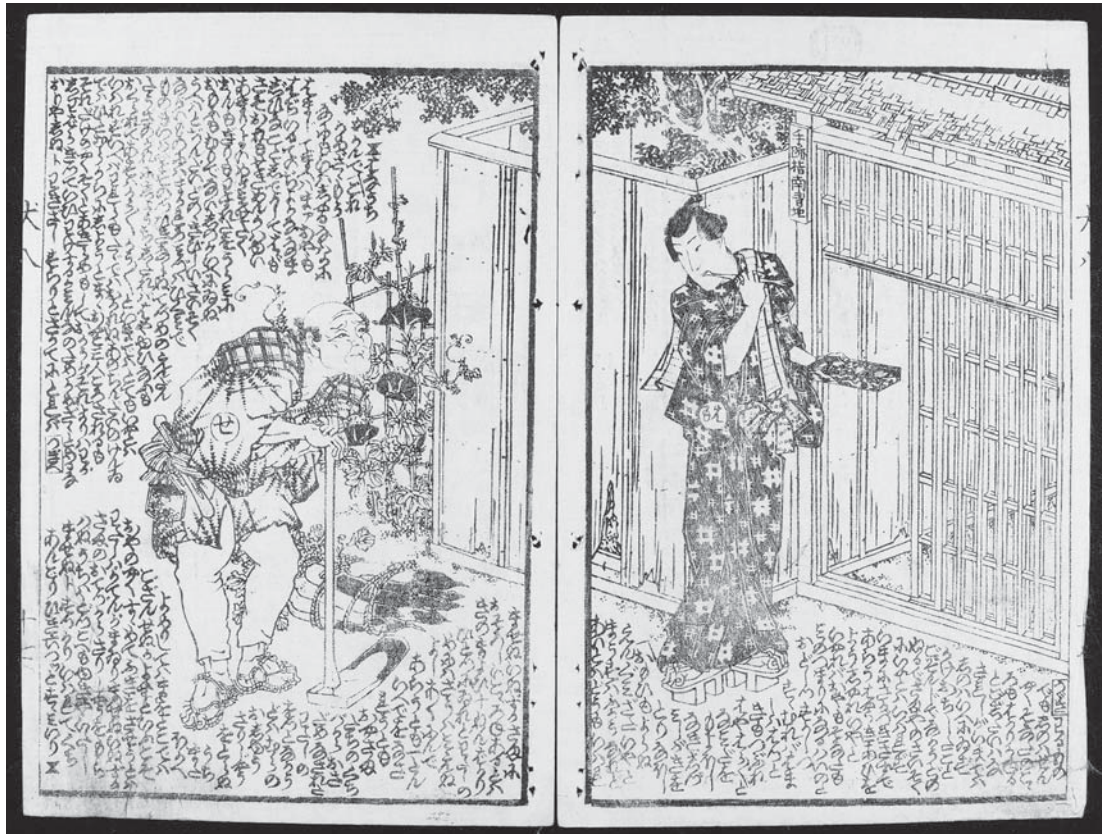
図版7 十五ウ、十六オ

とする。何時までも●」●延ばしておくは余りであらう」とやり込むれば、／『もうお案じなさり／ますな。今朝ほど篠兄は／追ひ遣りました。但し／何と取り留めた病／でなければ、娘が／ぶら／、今にまだ／起きませぬ』『そりや当／分のことであらう。まア／一つの邪魔払うて／大慶。この由告げて／取り決めますべし』ト／機嫌直して非義六を／待たせてひがみが／屋敷へ行き、や、久しく／して帰り来り、／『ひがみ殿にも／大喜び。』嫁御は風邪でもひいたで／あらう。此方へ迎へて／婿が手、療治を／すれば直治らう。／さてこの程は大石殿、／鎌倉の留守なれば／婚礼の願ひは／出されず。親の服喪／まだか、れば、表／立ちての披露目は追つて。／まづ客分／ひつそりと美味しい物は／宵に食へ。明日は吉日／内祝言、婿入り／を兼帯で四つ過ぎに／村長が所へ／行つて杯済まし、／嫁御を誘ひ帰る／べし。かの内／のこと／なれば、道具は遅く／なつてもよい。着の身／着のま、体さへ／連れて来ればそれでよい。／早く／と大急ぎ。／その通り用意／召され。万／一明日の夜、間違ひがあつては、貴様は言ふまで／なし、俺も腹を／切らねば済まぬ』トお／そかに言ひつけられ、／非義六は一義に／及ばず、たゞ／はい／と／畏まり、「あ。しかし／破魔児があの病氣。／垢だらけても良い／ならば、これも如何か／なりませう』ト／嬉しい中にも／心は済まず、／歸りてつぎへ

『年寄りはいけません。何時／かもお嬢／様のさう／仰つたものを、また／今日も忘れました。歸るとすぐ／にお届け申します』『白粉は中橋の／蔦屋の曙の富士、白芙蓉の／上はござりません』と、破魔児も／常に申してをります。／不躰ながら代／物が安くて／沢山で／そして極上／製で／ござり／ます』

〔十五ウ—十六オ〕

つぎきの由／瓶ぎ、に物語れば／大きに喜び、「陣代／殿へ嫁入すには拵へに／気が張つて並大抵ではある／まいと、有り様胸に痞へたが、／後は如何なれ、差し当たり●●着替へ／にも及／ばぬとは／注文／してもできぬ／仕合／はせ。／たゞ／片／意地な／あの／むす／め、●●納得／さすに骨が／折れう』『俺も／それが何より／苦勞。もし／違つては／四の



図版 8 十六ウ、十七オ

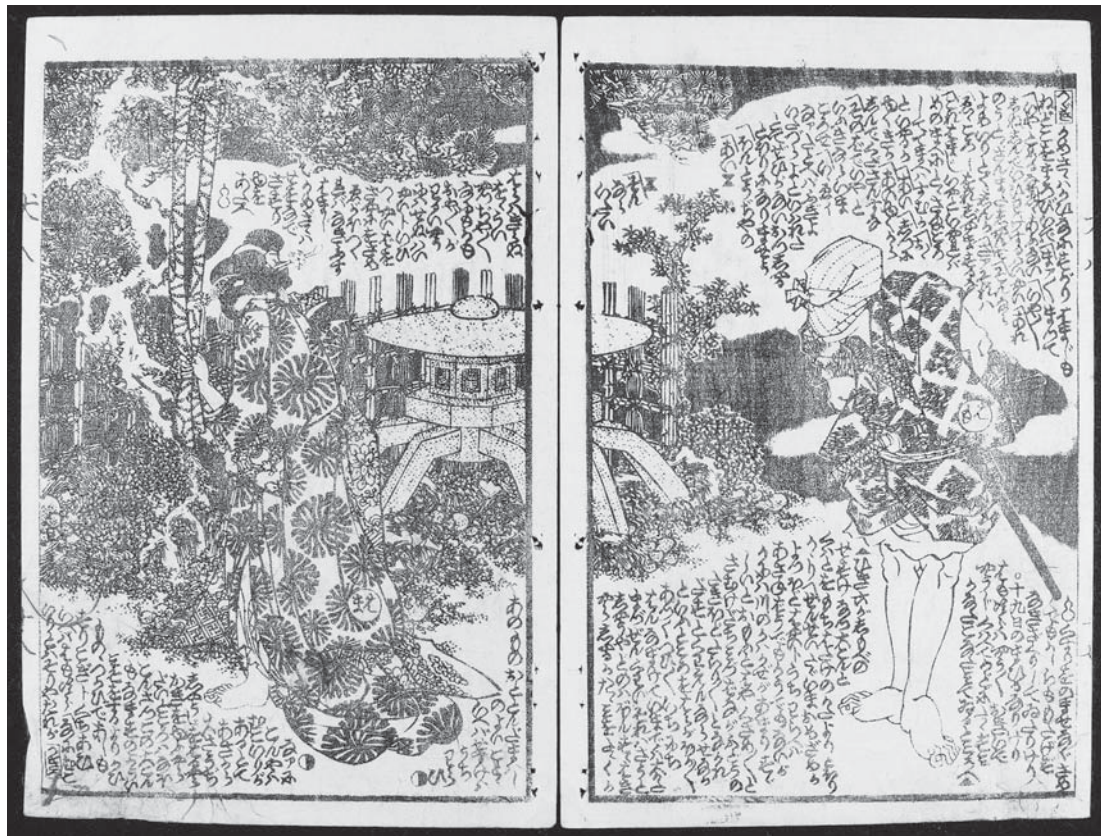
「巻へ」

四

三の巻より 互ひの身の上。斯うく言つたら斯うやつて」と言ひ合はせて、瓶ぎ、は破魔児が寝間へ起きつ、『小屏風でもこの暑さに引き回しては鬱陶しい、病に障る』ト押し畳み『何ぞ食べたい物はないか。嫌ひな酒もちと飲んで、うきくとしやらぬか。先の薬か効いたかして今朝よりは色も良い。其方の病気の原、いふは大方篠兎が瘡への種。そりや許嫁した男、娘心の一筋に思ひ込んでゐやうが、あれは此方の父様を親の敵と付け狙ひ、怪しい素振りのある故に世間でも評判／悪く、この村にも居難／なり許我へ参ると嘘吐いて、実は何処へか逐電した。神宮川で勿体ない、非義六殿を突き落としたは去に掛けの駄賃とやらか。運が強く船頭が助けたのでまア幸せ。●斯う言ふが偽りか、岳藏が帰つたら聞いてみやれ。違ひはない。あの様な悪者が一つに寝たこともなくて●何の其方を思つてゐよう。を、怖や恐／ろしや。あんな者に貞女を立て、くしく思ふは愚痴のい／たり。親に苦労／をかけるは不孝。あれには百倍／男も良い／婿を、母が取つてやる。それ、何時ぞやお泊まりなさ／れたひがみ様が御懇望 提灯に釣／り鐘の不釣り合ひも御承知。非義六殿は昔氣質、つぎへ

「十六ウー十七オ」

つぎ 悪者／でも篠兎は先／約、其方のこ、／ろも量りかねる／と御辞退はな／されしが、今では篠兎は家に居ず、／駆け落ちしたこと／御存じで、仲人の／ぬるで様、矢の催促／に嫌とは言はれず、／今に杯さすであらう。早う気合ひを／ようしやれ。嫌と／言やれば親も其方も／身の詰まりになるはいの」と／脅しつ／賺しつ／勧むれば、破魔／兎は「はつ」と／肝潰れ、／はやはらくと／涙を／催し／泣き沈／みしが、／氣を／取り直し／『思ひも寄らぬ／縁組み沙汰。嫌と／申すは不孝なれど、／あいとは如何も



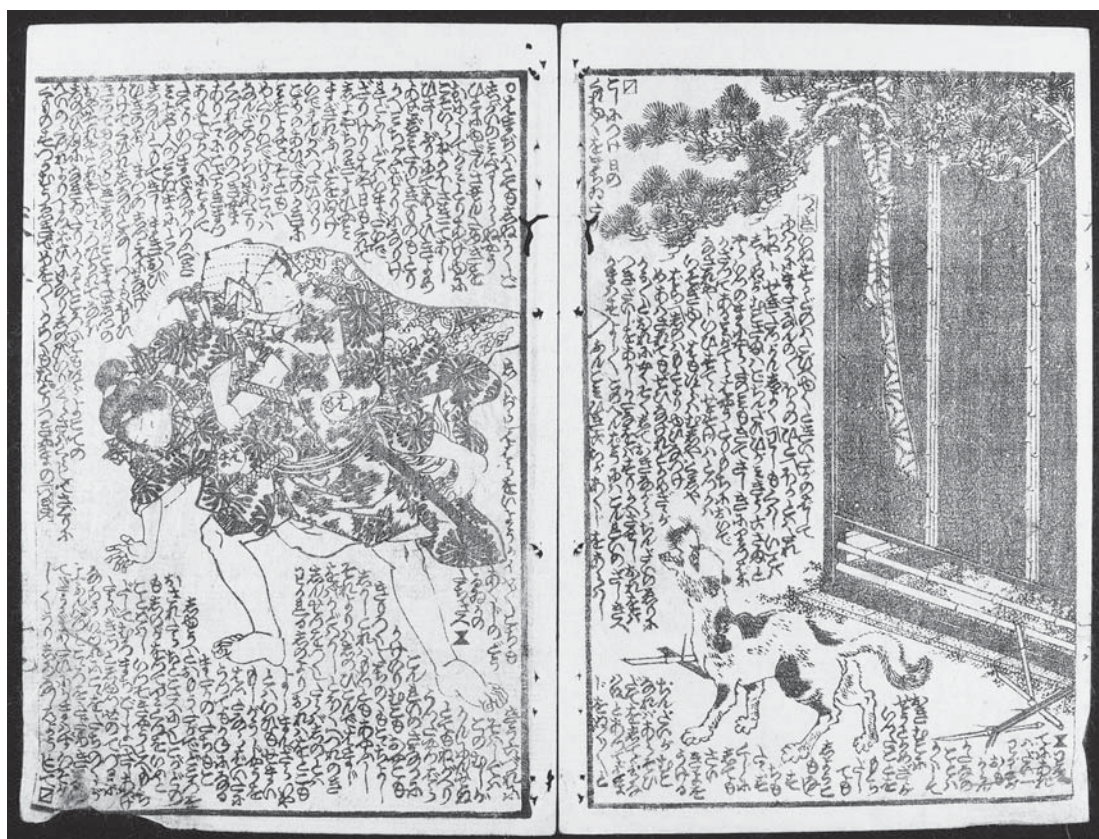
図版 9 十七ウ、十八才

言はれ」ませぬ。犬須賀様に／恐ろしい心根あるとは／氣の迷ひ。十年ばかり／一つに居れど、私の／目にはさうは見えぬ。／縦し悪人で／あらうとも、一旦／家出をなさ／れうとも、／親様／達の口／づからおさ／だめなされた／私の／夫。なかう／どは村の／お衆。／去り状／を取らぬ／内、／また／他へ／嫁入しては間男では／ござんせぬか。止せと言ふこそ／親の役。勧めて不義をさせうとは、／私は合点が参りませぬ。犬須賀／様のお手づから、去り状を貰／はぬ内は何処へも行きや致し／ませぬ」トすつかり言はれて口／あんごり。非義六つツと進み入り、●●洩打ち／擲んで『これ／瓶ざ、もう／何も言はしやるな。なに／破魔児、手前はまア親も／恥ぢ入る貞女かな。なま／じひなことし出来して母も／さぞ、俺も赤面。可愛い／余り好い目が見せた／恩も義理も忘れたを、恨みに／思ふも無理でない。篠兎が家に居ぬ／上はと、陣代殿、厳しい催促。／長いものには巻かれろ。水は低みで／ものも言はせず、退つ引きならぬ手詰めの縁談。／当座逃れに承知したれば、はや結納も／贈られて、明日は斯う／斯う／と、今ではとても嫌とは／言はれず。言へば我等もたゞでは置かれぬ。あの陣代の権威／では、一村空にしようと儘。親子三人殺されるも／それだけの約束と諦めもしておかうが、それよりは我が／鰹腹切つて言ひ訳すのかみんなの爲。瓶ざ、止めるな、／俺や死ぬ」ト、脇差すらりと逆手に取れば、**つぎへ**

手跡指南青地

〔十七ウー十八才〕

つぎ 瓶さ、は腕に縄に縋り、破魔児も／寢床を転び出で『まアく待つて』
／『いや止めるな』／『ゑ、危ない』『いやく／死ぬ。死んで言ひ訳するはい
やい』『あれ／のう父さん、待たしやんせ』『そんなら／嫁入り得心か』『さ
アそれは』／『ゑ、殺しをれ、邪魔するな』／『これ破魔児。嫌と言やれば
／目の前に父様殺／して手前は済むか』『応／と言やるか』『あい』『実に
行く気か』『あい。行くから／死んで下さんすな』／『その場で嫌と／言ふ
気なら、今／殺せ』『い、ゑイ／なア。例へば不義よ／悪戯よと言はれた
／とて是非がない。仰る／通りになりませう』／『本当ぢやの』／『あい』●



図版 10 十八ウ、十九オ

●／『そんなら／痛い』腹は切らぬ。／を、愛い／奴ぢやく。／何もかも／親／が／悪いやう／にはせぬはい／やい』ト言ひつゝ、刃を／鞘に収め、／笑顔作／れば泣き伏す／破魔児。／瓶ざ、は／背を撫で／擦り、／湯を／与へ／●●薬を飲ませ慰め／ても、頭も擡げず／泣き噓りして居たりけり。／○十九日の真昼なりけり。鱧次郎はやう／く／起き出で、／楊枝銜へて門に佇み／彼方此方見て居るところへ、●●非義六が僕の／端すけ、／夏大根と／鉄／とを持ち、畑の方より通り／掛／り『先生、只今お目覚めか。／よつほど早い』ト打ち笑へば／『朝寝坊でも斯うでもないが、／神宮川の川風があまり涼／しいと思ふとはや、噓／／と／寒氣立ち、水漬が不動の／滝ほどたり／／と流れ／出すと、火災なら背中／／といふところを腹がほか／／熱く、つひ／／一日／半怠けて、今では大方／まづ全快。それはさうと／庄屋殿は盆煤掃き／やらしやるか、畳を叩くか』あの物音。とんだ回し／のよいこと、／言へば、端すけは／打ち／笑／ひ／●●／『なアに、今夜は／婿入りがある／とて／朝から／大掃除。／障子を貼るやら／垣を結ふやら／台所は猶／混雑。この大根／も／膾の用意。／味噌／を／搗るより買ひ／物、使ひで足も／搗り粉木』ト口合ひ／言へば、鱧次郎『何、婿／入りとは、そりや誰が。』

〔十八ウ―十九オ〕

つゞき 犬須賀殿は旅へ行く／と聞いたが、延ばして／俄にまた『何の／／、他の人』『他とは誰／ぢや』ト急き立つ顔色。『僕も詳しいことは／知らぬが、婿様は御陣代ひがみ虬六様と／やら。何時の間にやら頼みも来て、座敷に立派に／飾つてある。見がてら早／取り持ちにお出で／なされや』ト言ひ捨て、端すけはとつかは／急ぎ行く。鱧次郎はむしやくしや／腹。『篠兎は元来許嫁、／娶されても是非なけれど、瓶ざ、が／斯う／／と俺に約束しておきながら、陣代の襟に／付き、大事を明かし刀をば拘り替へさせし俺をば／構はす。よし／／、この返報には婚禮の座敷へ／踏ん込み、非義六等が悪事を顕し』しくぢらして腹を癒ようか。イヤ／／此方も／悪事の同類。かの／太刀さへ／●●我が／手にあれ／ば、第一／我が答／重／からん。／刀の／ことは／隠して／おき、婿に／せうと瓶ざ、が／言つたこと



図版 11 十九ウ、二十オ

を／持ち／出し／ても／証／拠／もなし。／す／ちも／立／たず、／公／事／に／
しても／裁／許／を受ける／陣／代／が／婿／なれば、争／ひ／立／てを／しては／敵／
はぬ。とあつて、破／魔／／児／をぬく／と」此／六／連／れに／添／はしては、／この／
虫／が／堪／忍／せぬ。／とても寝／返／り／打／つた奴／原／／婚／礼／の最／中／に／驅／け入／り、
婿／も親／子／も／斬／り尽／くし立／ち退／くも心／地／良／し。／しかし／これは／最／も危／ふし。
／それ／よりは／忍／び込／んで破／魔／／児／をば／拐／かし、遠／くへ／連／れ退／き／親／切／を尽／
くしたらば、篠／兎／とは／別／れる、篠／兎／より俺／は男／も／良／し、満／更／嫌／／とは
言／ひもせまい。／もし強／情／を／張／つたなら、売／女／に／売／つても金／になる。
／また／かの太／刀／も故／主／へと思／うたが、出／所／を／推／されたら、ちと答／へ難／
し。許／我／殿／も篠／兎／が居／つて理／屈／を言／ふと／こと怖／し。い／つそ京／都／へ持／ち
／出／して室／町／御／所／へ差／し上／げ／たらば、き／つと出／世／の手／蔓／に／ならう。い
づれに／此／処／を立／ち退／くが／上／分／別／と心／を定／め、着／類／／手／道具／具／値／に構／は
ず忙／／しく売／り代／なし、路／用／として●●／腰／に付／け、日／の暮／れ行／くを
待／ち居／たり。」○破／魔／／児／は／とて／も死／ぬ覚／悟／、／死／骸／の見／苦／しからぬやう／
人／に油／断／させんため、氣／を／鬼／、／し／て髪／取／り上／げ、湯／に／こそ入／らね、顔／先／
手／足／／久／しぶりに／て洗／ひ清／め、／汗／染／みたりし着／物／も取／り／替／へ、見／違／ふば
か／りになりけ／れど、臥／所／は未／だ出／で／ざりけり。は／や日／も暮／れて／初／夜／近／
き宵／闇／／紛／れ臥／所／を抜／け／出／で縁／側／伝／ひ、塗／／籠／の間の垣／に／身／を寄／せて
外／面／へ／巡／り出／でけるが、此／処／は／納／戸／の裏／に当／たり／崩／れなりの築／山／／あ
／此／処／に小／高／き松／／ありて高／塀／に添／うて／立／てり。「何／時／まで存／らふべき
／身／ぞや。人／の見／ぬ間／に疾／く／死／なん」と持／て来／し巻／き帯／／引／き伸／ばし、松／
の下／枝／に掛／けて／縊／れ死／なんと為／しつ、も、思／ひ／切／つても懷／かしき
篠／兎／がこゝ、また実／の／親／、それ／やこれ／やに心／惹／かれて猶／／忍／び音／に泣／き
居／たり。かゝるところへ鱧／次／郎／、横／手／の／塀／の崩／れより四／つ這／ひになり忍／び
入／り、暗／さは暗／し手／探／りに／蜘蛛／の巣／掴／む、植／木／で目／を突／く、辛／くも辿／り

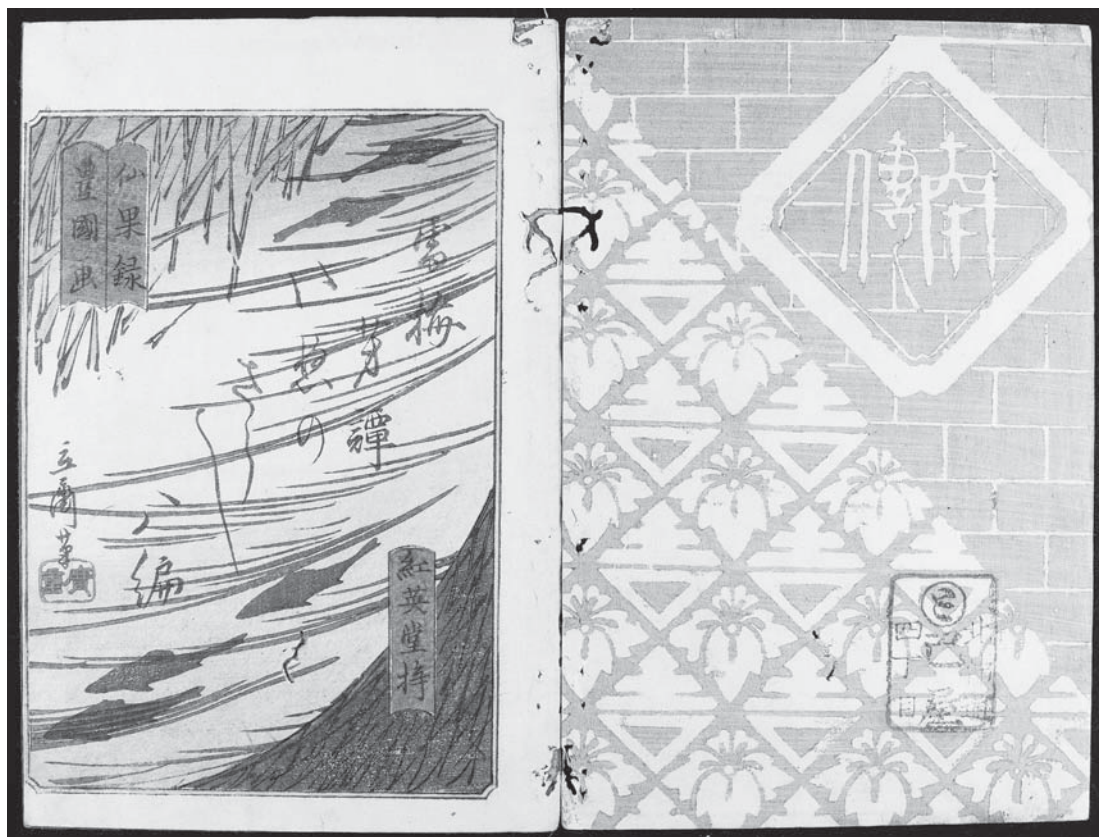
〔十九ウー二十オ〕

つづき
こ陰に立つたは確かに破魔児、縊れ死ななとする様なり。一婿を／嫌
うて命を捨てる操は篠兎へか、この鰻か。危ないところへ／我ながらよく



図版 12 二十ウ、原裏表紙見返し

こそ来れ」と、窺ふとも知らぬ破魔児は念仏の／声諸共に取り付く巻き帯、
 鱧次郎はしつかと抱き留め、『驚き／給ふな、鱧だヨ。死ぬには及ばぬ、
 連れて行く。無得心な親の非道、／腹に据ゑかね盗み出し、駆け落ちする用
 意はしつかり。案じ給ふな、／大丈夫』ト一人飲み込み慰むれば、『誰か
 と思へば鱧次郎、妨げ／するな、邪魔するな。此処を放／して死なせて』
 ト振り放し／ても離ればこそ。『そんなら篠兎が為に／真実であつた
 のか。／それではちと可笑しく／ないが、斯うなつては／もう意地尽く。／
 腕尽くでも／連れて行く』ト、かよ／わき破魔児を押し／伏せて、手拭ひ食
 ませ小脇に／搔い込み、枝に掛けたる巻き帯は／天の助けと、また引き纏ひ
 ／先の方を外へ投げ出し、／松の梢にひらりと登り／帯を力にずり下がり
 ／野良の方へぞ帰り行く。母屋離れし／所なれば、非義六夫婦その余の
 者もこの物音も／聞、つけず、ひたすら今宵の饗しの用意に余念／なかり
 しが、はや初夜の鐘音すなり。『今夜は格別／夜が短い。もう其方此方婿
 殿、ござる時刻に間も』あるまい。遠見を出しておくがよいぞ。破魔児には
 着物をは／着せ替へさせておくがよい。せめては紅は付けてやれ。案ずるよ
 り／産むが易いと、世話も焼かせず湯も使ひ、美／しうなつてゐた。／いや
 まだ花も生けてない。釜の飯が焦げ臭い。とんだ／ところに煙草盆、既に踏
 み壊すところだ。嗚呼忙しや／ト非義六が喋り回れば、瓶ざ、は破魔児
 が部屋を差し／覗き『枕に搔い巻きふはりと着せ、寝た様にして娘は／
 居ぬ。どうも可笑しい案配ぢや。申し、破魔児は／居ませぬ』『何ぢ
 や、娘が見えぬ。てう／づにでも行つたらう』『いゑ／居ま／せぬ』『そ
 んなら湯殿か。蔵でも／あるまい。さア大變』と呼び／立つれば、家内の者
 も／肝を消し、隈／捜／せど影も無し。『怪し／きは高塀に瓦の／落ち
 たる所もあり。／松から下げたる巻き／帯は、お嬢様の何時／もなさる
 、黒天鵲絨で／ござります』『さては逃けた』／と非義六は手に持つ花／生
 け投げ出し、眼／据わつて尻居にべつたり、呆れて顔も青褪めたり。／
 『さては篠兎めが釣り出したか』ト疑ふ瓶ざ、非義六は／『いや／／岳
 藏が付いてゐれば、さう自由にはなるまじきが、／氣遣はしいは鱧次郎。家
 に居るか見て来い』と僕を遣はし／『空き店になつてゐます』と告げ来れ
 ば、『さてこそ彼奴が／業なり』と『誰は西、彼は東、年寄りでも容／赦は



図版 13 八編下原裏表紙八編上下袋

せられぬ。湍すけも行け」と追つ手を出だし、二人は顔を●」●見合はせて、非義／六が花生けの水に濡れたる袴も／拭はず、手に冷や汗す。握り詰め、「白粉を付けぬばかり、湯を使つたり／髪結うたに、出し抜かれたは此方の粗相。／早う連れて戻ればよいが」ト案じに／暮れたるその折から、神宮川の／と太郎は賭け事に打ち負けて／元手を借りんと入り来れば／『良いところへ／、褒美は／幾らほどでも遣る。斯う／の／子細にて、／娘と／鯉が駆け落ち／した。追つ手に／行つて下され』／と頼まれて／打ち領き、／『そんなら先／途中で見た駕籠の／女中は此方の／娘御、侍は／鯉めであつたか。／駕籠舁きも知つた奴等、／礫川から本郷へ／行つたに違はぬ。もうち／つと／手遅れしたが、追つ付かれぬ／こともあるまい。そんなら直ぐ／様、どりや／一走り』／と／尻引つ縛れば『鯉次郎も／武士の浪人、素手ではあぶ／ない。これ差して』と非義六が／差し出す脇差つぎへ

〔二十ウ〕

つゞき 取るより早く腰にぼつ込み、／『ぬらくら者、鯉の骨切り、／この切れ物にも及ばねど、／これでは龍に／翼とやら、羽節に／掻い込み雌鳥／雄鳥、手捕りに／するは今の間。／酒熱くして／お待ちなせへ』ト／言ひ捨て／宙を／飛んで行く。

来ル六月十九日／申下刻

火定／お門塚／山麓

寂寞道人肩柳

一名八犬傳／犬の草紙

舌者 仙果

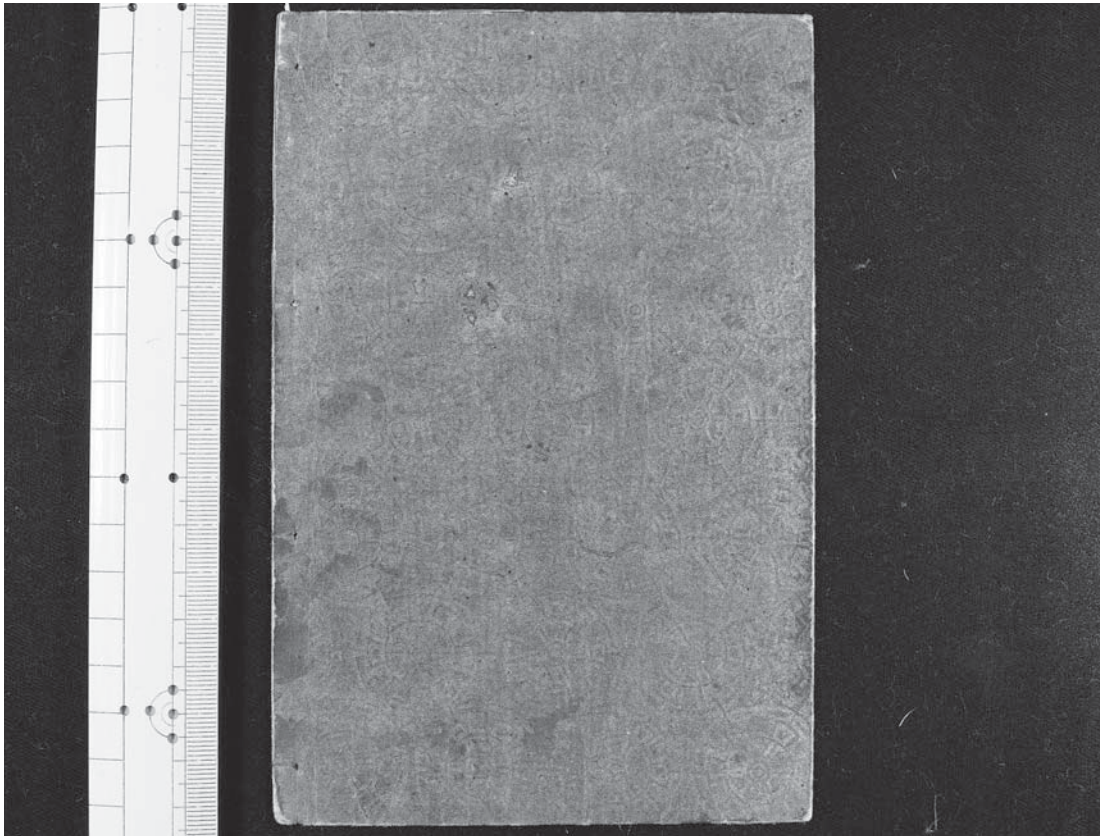
画師 豊國

中橋つたやにて

九編引続け／売り出し

○御薬白粉／白芙蓉／一包／三十六文

○同薄化粧／曙の富士／一包／三十六文



図版 14 七編八編改装裏表紙

○顔の白粉／桜香／一包／廿四文
 ○襟白粉／ぱつちり／一袋／四十八文
 右は／板元／蔦屋／吉蔵方／にて／賣／広め／申候

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／□／甲／寅／春／新／鐫／目／録

（振り仮名は原文のまま）

おほみそかあけぼのさうし 廿編／廿二編 京山作／芳綱画
 大晦日 曙 草紙 五編／大尾 西馬補／芳綱画
 連理翅 山雞奇縁 廿八編／ヨリ／卅三編／マデ 仙果録／豊國画／國貞画
 八犬傳犬の草紙 三／四 同録／國貞画
 松浦船水棹 婦言 十編／十二編 同録／國貞画
 御 贊美少 年始 十編／十二編 同録／國貞画
 八重撫子果 物語 二／三 同録／國貞画
 俠客傳 摸略説 十編／十一編 西馬譯／同画
 花 蓑笠梅雅物語 三／四 西馬譯／國輝画
 嶋巡 浪間朝日奈 六編／七編 種員譯／國貞画
 小幡小平次物語 初／二／三 五瓶作／國貞画
 鹽屋／文正 古今草紙合 十一編／十二編 仙果作／國輝画
 東都南傳馬町一丁目／地本問屋蔦屋吉蔵板

〔原裏表紙〕

南／傳

〔袋〕

雪梅／芳譚

いぬの／さう／し

八編

立齋筆 廣／重

仙果録／豊國画

紅英堂梓

捺印

〔十一才〕

衣／笠

濱

〔原裏表紙〕

北仲通／㊦巴屋／四丁目

登場人物一覽（八編下）

次に『雪梅芳譚犬の草紙』八編下の登場人物名（その他）を掲げ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物等の名を示す。

犬須賀篠児成孝【犬塚信乃成孝】

犬須賀磐作一戌【犬塚番作一戌】の子。磐作の死後、伯母瓶ざ、と伯母婿非義六夫婦に養われる。亡父から託された亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を、非義六の刀とすり替えられたことに気づかないまま、持氏の末子成氏【成氏】に献上するために許我【許我】へと旅立った。

岳藏【額藏】

非義六の下男。篠児と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪いふりをしている。篠児の出立直前に、瓶ざ、から篠児を殺すようにと、密かに篠児の祖父犬須賀正作参成【犬塚匠作三戌】の脇差きりいちもんじ【桐一文字】を渡されたことを、許我への旅に同行する途中の栗橋【栗橋】の宿屋で、篠児に話した。その翌日、篠児と別れて一人、犬須賀村【犬塚村】へと帰った。

犬須賀非義六【犬塚墓六】

犬須賀村の村長。瓶ざ、の入り婿。磐作の死後、篠児を引き取り養育していた。篠児が許我へと旅立った翌日、娘の破魔児とひがみ虬六との婚礼の準備をしている最中、破魔児と鱧次郎の駆け落ちを知り、家中の召使い達に破魔児を連れ戻すように命じた。

瓶ざ、【龜篠】

篠児の父磐作の異腹の姉で、非義六を婿に迎えた。篠児の旅に岳藏を同行させ、途中で篠児を殺すようにと亡父正作の脇差を渡した。

破魔児【濱路】

非義六、瓶ざ、夫婦の養女。許婚の篠兎が許我へ旅立った翌日、突然自分と虬六と婚礼させられることになっているのに驚き、初めは拒むものの、非義六に脅されて一旦は承諾する。しかし篠兎への思いから首を括ろうとしたところを、鰐次郎に阻止され、連れ去られてしまう。

青地鰐次郎【網乾左母二郎】

大須賀村に住む浪人。瓶ざ、に、破魔児の婿にする代わりに村雨丸を非義六の刀とすり替えるように唆され、これに協力するが、実は更に密かに村雨丸を自分の刀とすり替えて盗み取っていた。虬六と破魔児との婚礼を知り、腹いせに破魔児を無理矢理連れ去った。

ど太郎【土太郎】

神宮川【神宮河】の船頭。非義六のもとへ金の無心に来たところを、破魔児を連れ戻すようにと非義六に頼まれ、鰐次郎を追いかける。

湍すけ【背介】

非義六の老僕。

ひがみ虬六【簀上宮六】

大石ひやうゑのじよう【大石兵衛尉】の陣代。ひがみじや太夫【簀上蛇太夫】の子。父の死後跡を継ぎ、巡見した先の非義六の家で破魔児に一目惚れをする。篠兎が許我へ旅立った翌日に、自分と破魔児との婚礼を挙げるようにと非義六に迫った。会話にのみ登場。

ぬるで媒次【軍木五倍二】

虬六の下司。虬六と破魔児の縁談を取り持ち、篠兎の旅立ちを聞いて、虬六と破魔児の婚礼を急がせた。

寂寞道人肩柳【寂寞道人肩柳】
挿絵に名前のみ登場。